

# 三四 昭和五年史

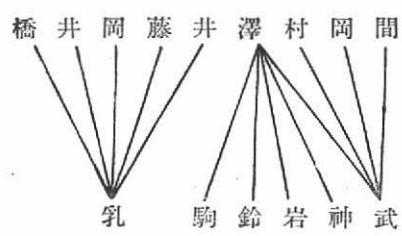
## (一) 卒業生送別紅白勝負

二月十一日

卒業生送別紅白勝負

(紅)

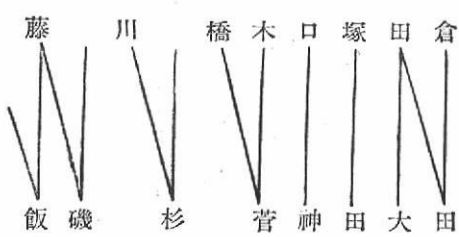
高 今 濱 遠 小 大 木 吉 佐  
坂 久



(白)

井 井 木 崎 保 林

武 平 清 南 高 鈴 川 石 杉 坂



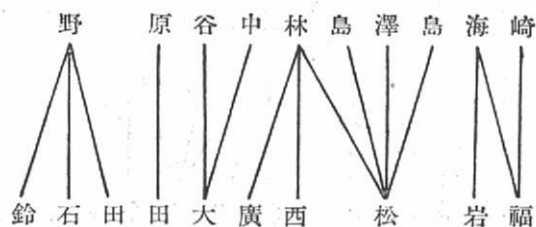
田 邊 原 原 戶 中(淳) 澤 中(久)



五月

梶 菅 熊 田 武 野 黑 飯 内 間

(紅)

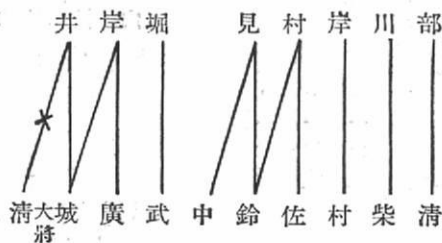


(白)

木 塚 室 中 澤 川 川 本 崎 島

(二) 新入部員歡迎紅白勝負

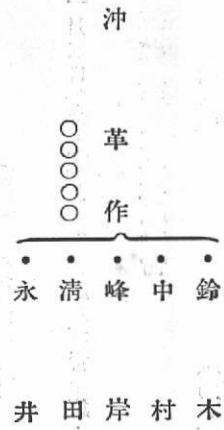
永大峰新 淺中峯今阿  
將



久

田 崎 田 藤 野 木 間 山 田 川

五人掛

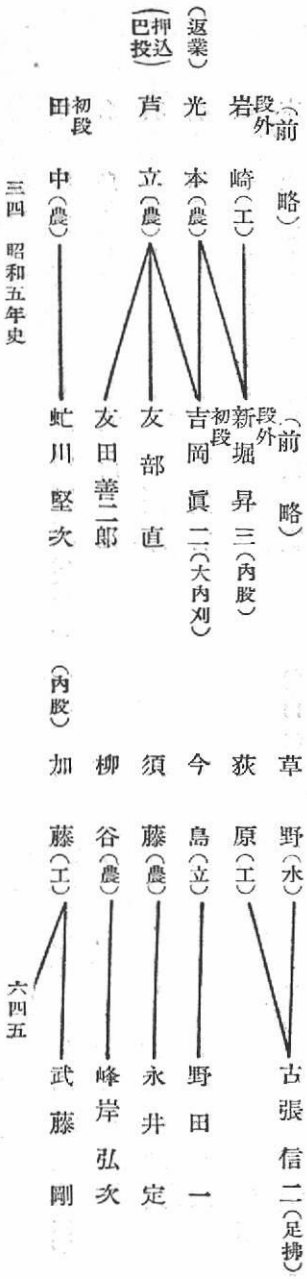


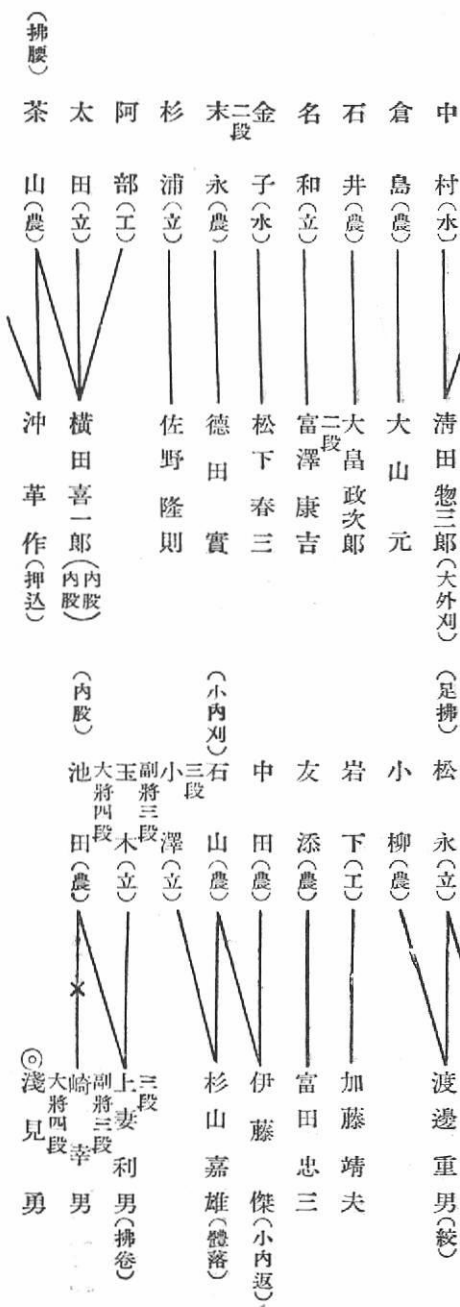
(三) 對四校聯合勝負

六月十四日午後一時より綱町道場に於て舉行、双方各五十一名。本塾側は有段者に達するまでに二人ばかり喰ひ込まれてゐたが、二段の半ばに於て互勢となり、戦進むに随つて優勢を示し、最後に大將を残して勝利を握つた。

(聯合軍)

(本塾)





### (四) 第四十回大會

十一月二日午前九時より幼年組及び青年組紅白勝負あり、それより左の試合に移つた。

#### 普通部對商工部試合

(普通部)

飯田 武二

(商工部)

田島 敏夫

(大内刈)

古屋 幸三

安藤 英一

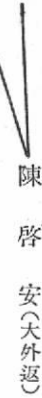
岩崎 秀吉

(拂腰)  
送足拂

羽鳥 忠久



黑田 寬



秋山 正



窪田 行正



藤山 洋吉



(大外刈)



相羽 良次郎 ○  
大將 梶野 博  
副將 飯田 正治

對外來一本勝負

(有級者之部)

(立正) 横山



(秋元) 秋元

元

(三田) 本

道

(三田) 石



(三田) 千

住

(秋元) 埜



(立正) 金



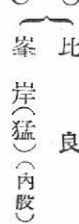
(三田) 阿



(六) 鈴



(市) 比



(初段之部)

(市一) 湖上  
(八) 今川(合業)

(九) 立教 長野  
× 城崎

(學習) 小山  
(一〇) × 佐久

(至剛) 鷗殿  
(一一) × 中野

(農大) 須藤  
(一二) × 野田

投之形

四段 淺見 勇  
四段 五島 三雄

(二段之部)

(三田) 川崎  
(一) 佐野(押込)

固之形

三段 高木 恒治郎  
三段 安東 喜四夫

(至剛) 芹田  
(一三) × 岸(弘)

(至剛) 鳴澤  
(一四) × 中村

(三田) 大塚  
(一五) × 澤海

(國士) 村海  
(一六) 島(勇)(釣込足)

(立教) 鈴木  
(一七) 石井(内股返)

極之形

三段 片山 正周  
二段 松下 春三

(立教) 高辻  
(一八) × 鈴木(俊)

(三田) 小田部  
(一九) × 武藤

(麻布) 小田切(跳腰)  
(二〇) 新堀

(農大) 須藤(内股)  
(二一) 高橋

(國士) 森邊  
(二) × 渡邊

(農大) 小柳  
(三) × 横田

(農大) 中田  
(四) × 沖田(合業)

(三段之部)

(中大)

奥

(六) x 片

村 山

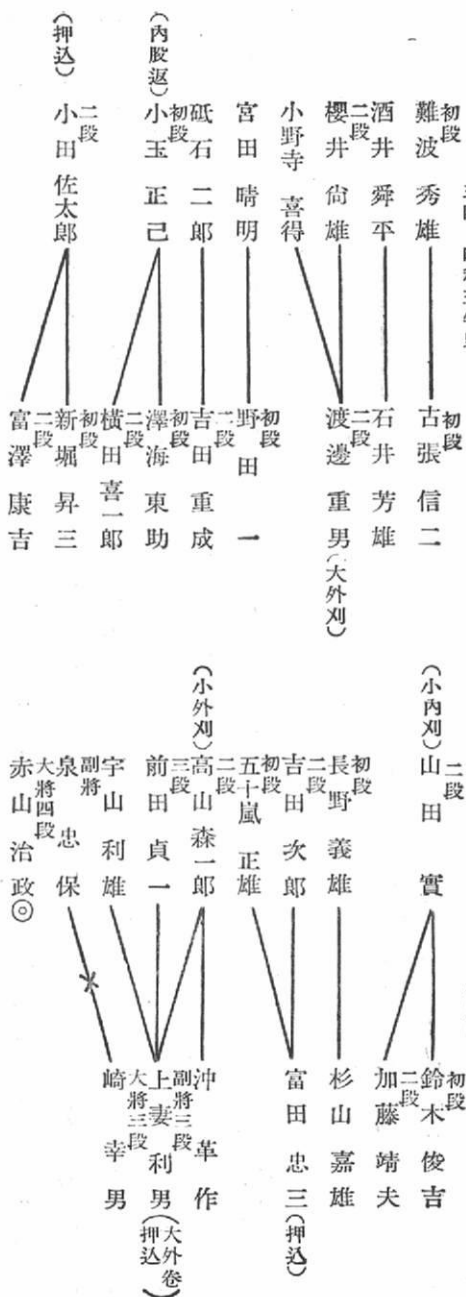
### (五) 第三回對早高試合

本試合は是迄一勝一敗にて今回は其決勝戦である。殊に本年よりオール慶早戦を開始する企もあり、選手は大に意氣込んでゐたのであつた。然るに今秋の交渉中早稻田方にては、本試合が年々十一月中旬に行はるゝを例とせるに拘らず、突如十月十七日に舉行すべしと主張し、萬一之に應ぜざれば中止の外なく、而も中止の責は慶應にて負ふべしとの舊式的外交の態度で突掛つて來た。依つて當方よりは、事理を明白にして再考を求めたるに、直に前言を改めて十一月十八日舉行のことに同意するに至つたのである。時恰も塾方にては、大將崎三段の大負傷を始め、豪の者三四人負傷者ありたることとて、彼は小賢しくも此の機に乗ぜんとしたのであつた。

十一月十八日午後二時より文理科大学に於て、六段小田常胤氏審判の下に決戦は開始された。塾方の闘士負傷猶癒えず加ふるに敵方の見苦しき戦略に惱まされて、可惜一敗地に塗れたとは云へ、正々堂々たる我が軍の態度は場内を壓してゐた。其勝負左の如し。(段の表示なきは前に同じ)







(六) 第三回慶早試合観戦所感

中 村 愛 作

今度の早慶試合程皆に氣をもませた勝負は未だ曾てなかつたであらう。先づ試合の日取の事から早軍と妙な紛紜を生じて一時は我軍も全く戦意を失ひ、張り切た意氣もどこかに飛でしまつたと云ふ譯で、柔友會委員諸君の痛心焦慮は非常なもので有た。幸にして結局例年の通り十一月半に開催すると云ふ事に成たのだが、扱て合宿を始めて見ると、一旦冷却した戦意と云ふものは容易に再び燃へて來ない。集る者も少く又稽古にも氣が乗らない。幹事や委員の焦慮は痛ましい様で

有た。合宿期も半を過ぎて漸く幾分油が乗つて來たかと思ふと、今度は有力なる戰鬪艦に負傷續出だ。大將崎君の足は依然として治らず、道場に來るにも跛を引き乍らで、固より稽古などは出來ない。然るに何たる不幸ぞ、勝負前十日程と成て副將の上妻君は何故か足を腫らして、慶應病院に入院し切開手術を受け、勝負に出られるかどうか判らない。三將沖君も亦手と足を痛めて満足な稽古は六ヶ敷い。之等の超努級を始めとして、風引きやら發熱やらで戰士の大部分が傷いてしまつたのである。

委員や幹事が此間に在て、血眼に成て士氣の鼓舞に奔走されると共に、今度の合戰の總司令官たる安東君が飽かず撓まず毎日道場に出勤して、選手の指導獎勵に専念して居られた有様は、側の見る目も涙ぐましい様な光景で、流石は塾の柔道家なればこそとの感に打たれた。

斯の如くして遂に十一月十八日は來たのである。天氣晴朗、冷氣漸く身にしみて筋骨自ら躍る様な日で有た。

僕は已むを得ない用事が有て定刻の二時に後れ、勝負は第五番目の古張對難波のから見物した。場に入て先づ番組を見ると、懸念して居た怪我人は皆名前を列して居る。目を轉じて選手席を見ると、大將副將以下何れも堂々と出陣して、爛々たる眼光敵を睥睨し、元氣に満ちた面構へをして居る。僕は悅れしかつた。噫此意氣と覺悟あらば、怪我や熱など何かあらんと頼もしく感じた。

而して勝負は如何と見ると、果して我軍の堂々たる武者振は實に敵を呑むの概が有た。而も其戰法の常に正攻法たる點に至ては實に會心のものが有た。

早慶柔道試合は之が三回目で、第一回戰は我軍の勝、第二回は我軍の負、今度が決勝戰と云ふ譯だが、實は第一回の我勝利には我々觀戰武官側に頗る不滿が有て、勝は勝たが僕なども云ひ難い苦言を選手諸君に呈した事で有た。然るに第二回は負は負たが堂々たる負で、却て一般の賞讃を博した。此負は柔道界革正の犠牲として已むを得ない事で、僕なども負

けたのは残念で有たが、天下の爲めに大に悦び、塾の柔道部を祝福したので有た。而して今日更に第二回戦と同様、或は夫れ以上の勝負を拜見したのである。

勝負に對する所感を簡略に述べて見るなれば、先づ古張君對難波君の勝負に於て我軍の意氣が窺はれた。古張君の攻勢、而も跳腰が時々好い所に行て惜しき引分。石井君對酒井君の勝負に於ける酒井君の醜き守勢、而も其間に於て無用な聞き苦しき虚勢の掛け聲、まるでへぼ撃劍の試合の様な有様は品に於て格段の差異が見られた。次に又渡邊君が櫻井君の醜き守勢を攻めて攻めて攻め抜て、遂に大外に刈り落したのは胸のすく様で有た。然し其爲めに次の小野寺君と戦ふ時は體力衰へて、守勢一方と成たのも已むを得なかつたかも知れない。然し此勝負での小野寺君の態度は、敵ながら天晴で有た。此日早軍唯一の武者振で有たらう。

次の野田君對宮田君の立合も、野田君が時々機を狙ては攻勢に出る態度中々要領好かつた。次の吉田君對砥石君は誠に好勝負で面白かつたが、是れも矢張我吉田君が攻勢で有た。次の澤海君對小玉君の勝負は、小玉君中々要領好く而も鋭い所を見せた。遂に體落に切つて落したのは美事で有た。續て次の横田君との戦も實に火花を散らし、互に虚々實々の態度は手に汗を握らせた。小野寺君と共に小玉君は、此日早軍の爲めに大に名譽を維持したものと謂ふべしである。

新堀君對小田君の戦は、此日新堀君の策戦外れたのか、前回の如き巧妙を見せず、簡單に押へられてしまつたが、次の富澤君が出て小田君を完膚なき迄に攻め抜き、小田君の態度頗る醜く辛ふじて引分と成たのは嫌で有た。鈴木君對山田君の勝負は、鈴木君が負けたが、此間實に思ひもよらぬ不愉快な事が起た。初め山田君が大に虚勢を張て居たが、之に對し鈴木君が中々要領好く攻め込んで居る内に、山田君何と思たか突然ガアと咽喉を鳴してプツと道場に痰を吐いた。夫れは塾方戰士の膝の直ぐ前に、思はず觀衆一同アツと云て呆れた。何と云ふ無作法な事であらう、塾選手の一人が黙て紙を出して之を拭たが、其奥床しさ實に雲と泥との相違だ。早大道場では珍らしくないのかも知れぬが、我々は實に吃驚させら

れた。鈴木君が最後の振鈴直後引分の宣告の下る間に、一寸氣を抜いた爲め小外刈を食て選手溜に尻持を突たのを一本に取られたのは、裏側に居られた審判の見損ひではないかと思はれたが、兎にも角にも鈴木君の不覺である。今後の注意肝要。續て出た加藤君が山田君を攻めに攻め、見て居てもハラ／＼する様で有た。山田君は最早痰を吐くの餘裕もなかつたか、一生懸命逃げ廻はる態度は痰吐き同様醜かつた。加藤君は第一回戦の時に態度聊か勝に落ちざるものありて僕は苦言を呈した記憶がある。然るに僕は此勝負を見て大に後悔した。同君が僕の忠言を容れ過ぎて呉れたのか、あゝ迄攻撃して若し返しても取られては大變だと、實は總べてが僕の責任であるが如き感じがして實に居たゝまらなかつた。幸に山田君が徹底的の逃腰で有たので、加藤君は丁度弟子に稽古でも付ける様な態度で引分に成た。

次の杉山君對長野君の試合も長野君の逃腰、言語道斷。富田君對吉田君の取組も吉田の逃げ廻はるを遂に取て押へて撃退したのだが、其前一度立派に押込み、將に三十秒の鈴の鳴らんとする時に押込が多少崩れた爲め、再び大骨折で美事に押へ直した處、更に三十秒の宣告を受け之を押へ切たと云ふ譯で、此間に非常に力を使ひ疲勞をしてしまつたのは、審判の一考を煩はし度い所で有た。所が次の五十嵐君と云ふのが又觀衆を驚かした。只だ徒に馬力が有て業などは全くなく、勞れた富田君を無暗と引廻はして居たが、思ふ様にならぬ爲めか突然ビシャンと云ふ音がしたと思たら、富田君の横面を張たのだ。一同再び呆氣に取られたが、審判は黙て之を看過して居る。果然我飯塚師範は見兼ねて審判に抗議を申出で、三船早大師範と三人合議した結果、審判から引分の宣告が下た。何たる不合理な審判であらう。五十嵐君が打たのが事實なれば、云ふ迄もなく同君の負に疑はない。又打たのでなく間違て手が當つたのであれば、其まゝ試合を繼續すべきである。引分と云ふのは同罪を意味する。加害者と被害者と同罪とは、實に奇妙なる判決と云はざるを得ない。若しも之が先例として取り得るなれば、強い相手に出會た時には、直に横面を一つ御見舞ひ申して引分に成て來れば好いと云ふ事になる。審判の不合理は夫れとして、如何に激すればとて神聖なる對抗試合に於て、相手の面を打つと云ふが如き無法には再

び觀衆一同呆れてしまつた。尤も五十嵐君は勝負後直に富田君の所に來て手を突て謝罪をして居た。之は誠に男らしき好い態度で、大に君の不名譽を回復したが、兎にも角にも斯様な相手とは勝負が取り難い。是非とも審判が權威を以て取締て呉れるに非れば、根本的に此大試合の運命にも關する事と思ふ。

次に出たのが我軍の鬪將沖君である、固より相手の高山君に對しては實力に於て相違がある、着々壓迫して行たが、意外にも一寸したはづみに右小外刈で業を取られた。我軍の將士思はず色を變へた。沖君は平然と尙遠慮なく攻勢を續けて居る。然るに又しても同様の小外刈を喰つて合せて一本を取られた。此審判には固より何等の文句はない。我沖君は確に負けたのだ。少くとも二三人は引受けて呉れると、何人も疑はなかつた沖君は、有り餘る實力を抱へて無念の涙を目一杯にしながら、俯向き勝に敗退して來た。我陣中には俄然悲壯の氣が漲つた。僕は潛越ながら茲で僕の所見を同君に申上げて見度い。同君があゝの實力を持って居て、時に斯様な不覺を取る事があるのは、僕の見るところでは第一には同君が業を出し過ぎると思ふ。餘りに無暗に攻め立てるので、相手は返て堅固になり、自分の足がもつれる其際に、足に非常なる弱點を暴露する。僕としてはモツト君に機を待て狙ひ撃ちに業を出す事を希望する。第二には同君の稽古が餘り好過ぎる。いつ迄も幼年式の無理のない稽古である。然るに同君は今やアノ上わ背とアノ體力を持って居るのだ。而して少しも之を利用して居ない。飯塚先生には叱られるかも知れぬが、モツトあの體力を利用して押つかぶせた無理をやるが好いと思ふ。元氣潑瀾たる時代には、少々は無理をやるが好いと思ふ。

茲に於てか我軍切ての痛快兒副將上妻君は決然として立た。サー來いと掛聲も勇ましく、相手を吞でかゝた所の武者振は、昔戰國時代の若武者も斯くやあらんと見られた。先づ高山君を大内刈返しで殆ど一本を取り、續て亂暴極はまる大外刈で美事に投飛ばした。續て出た前田三段を又亂暴なる大外刈で殆ど一本投げて、續て横四方にガツチと押へて二本振り取て首をかいた。續て出た宇山三段がこは味方の一大事と許り腰を引ての引分主義、然るに此時何とした事か、突然上

妻君はあのキュービーの様な目をキョロ／＼させて、張出してある番組を見たり早軍選手の顔を見たり、又自分の頭を叩いて見たり目を閉じて見たり、頗る様子が可笑しい。上妻君が勝負中に側見をするなどとは、未だ曾てない事である。さうかと思ふと突飛な内股を再々かけて自ら倒れさうになる。我々は實にハラハラした。幸に相手が徹底的の引分主義なので絶對優勢を持って事なく引分に成た。後に上妻君に聞くと、どうした事か初めの二人を投げたのは全く知らない。三人目の時にフト氣が付て見ると、いつか自分が二人投げたらしい。然し自分には覺へがない、ハテ不思議と取組や早大戰士の顔を見たのださうで、早軍の二人は夢中の内に平けられてしまつたのだ。丁度僕の所の子供が御馳走を食べる時に、三杯目から初めて味が判ると云ふのと同じ格で、味の判らない内に首をなくした二人こそ好い面の皮と謂ふべしだ。上妻君の切開した許りの足の痛みなどはどこかへフツ飛でしまつた。青年の意氣として學ぶべきであらうと思ふ。

遂に我軍の總帥崎君が出た。敵の副將泉君と戦たのだが、泉君が又絶對の守勢、成程算盤をはちくと、早軍には未だ大將が残つて居るのだから、此勝負が引分になれば勝である。依て一切の野心を棄て、御生大事と自重して居るのは、青年としては餘り好い圖ではない。然るに崎君は之を又猛烈に攻撃した。之が勝負直前迄跛を引かなければ歩けない、且つ此夏以來一度も稽古の出来なかつた崎君とは思へない。無論崎君だつて神經と云ふものがない筈はないから痛かつたには相違ないが、一向痛さうな顔もしない。全心身は只だ敵を倒す事の一事より外何ものもない。攻めて攻めて攻め抜て遂に振鈴で引分と成つてしまつた。

斯の如くして第三回戦は我軍の負として終つた。然し負は負けでも光輝ある負けで有た。我々應援軍には何等の遺憾はない。我々は我選手諸君に依て我々の理想とする眞の柔道のエキジビションをしたと思ふ。而して我部の柔道が、精神的にも、如何に他に勝れて居るかと云ふ事を完全にデモンストレートしたと思ふ。僕は終に臨んで、厚く戰士諸君及び之を指導された兩師範と安東監督に敬意を表する。

尙此の機會に僕の所感を一言附記して見度いのは、前に記した如く此慶早戦は第一回は我軍の勝利で有たが、我戰士の態度に幾分面白ろからざるもの有て一部の非難を買つた。然るに第二回並に第三回は斯くの如く正々堂々の戦法で、負けは負けが一同の深き賞讃を博した。而して勝つた早軍の態度なるものは、到底第一回戦に於ける我軍の夫れの様な程度ではない。全く柔道精神を没却して居りはしないかと思はれる様で有た。

右の事實を又冷靜に觀察して見ると、僕には斯様な疑問が起るのである。第一回には我軍が幾分でも非難されるが如き態度を取たから勝つたので、後の二回は正々堂々で有たから負けたのではないか、則ち對抗勝負に勝つものには、正々堂々ならざる態度が必要なのではないか、果して然らば出々しき大事である。柔道修業の價値の一半を占めて居ると信ずる勝負が、柔道精神其ものと相反する傾向を獎勵すると云ふが如き矛盾があるとすれば、斯道の先覺者は一日も之を看過して居る事は出来ない筈である。而して僕は確に此傾向があると思ふ。

此點に付ては僕は他日大に論じて見度いのであるが、今日は簡單に其結論丈けを記すに止めて置かう。乃ち之を救ふ爲には、モット審判規定を確立し、審判者に權威を以て之が勵行を爲さしめ、柔道精神に反する行爲或は態度ありたるものに對しては負を宣するの權利を與へ、人格ある審判者に依て之を斷行せしむるのである。斯くすれば初めて醜き引分主義や、痰吐、張手等の無作法も影を消す事であらうと思ふ。然し夫れと共に又審判者も神でないから時に誤認を免れない。斯様な場合の爲めに對抗試合には兩軍に主將を設け、之より隨時審判者に對し抗議或は交渉を申出で得る事とし度い。然し結局審判者の判定が最後のもので、絶對服従である事は申す迄もない、聊か所思の大綱を記して諸君の御教示を仰ぐ次第である。

(七) 雜記

進級一括

○一月に進級したる者左の如し

二級へ 上野正二、佐久間知三、小柳道孝(編入)

○五月の進級者

二級へ 梶野 博、柴田尙武

○六月中の進級者

二級へ 鈴木千一郎、阿部泰介(以上六月三日)、磯邊義介、石塚貫之助、千佳榮一、清川 晃、飯田正治(以上六月二十四日)

一級へ 今川敏夫、佐久間知三(以上六月二十四日)

○十月十日附進級

一級へ 相羽良次郎

○十一月九日附進級

二級へ 山本繁太郎



## (八) 三田 柔友會 記事

### 飯塚茂氏慰勞祝賀會

過去五十年間道場に引籠りて、門外一步をも踏出す事を敢へてせざりし講道館柔道が、本年度の恒例鏡開式（一月十八日舉行）より、日比谷公會堂に於て花々しくも所謂街頭進出を爲し、斯界に一大センセーションを起し、大成功を収めたるが、其最大功勞者とも稱すべき會員飯塚茂氏を招き、一月二十二日夕刻交詢社ビルディング内慶應俱樂部に於て、祝賀慰勞の會を催した。

一同地階東洋軒に於て食卓を共にし、デザートコースに入るや、吉武顧問より飯塚氏の勞を稿ひ、且つ祝辭を述べ、食後俱樂部會議室に於て懇談會を開いた、

席上飯塚氏より具に經過の報告あり、兼て謝辭を述べたるが、因襲にのみ擒はれたる當事者を斯く覺醒せしめたる苦心談に至りては、一同深く肝銘した所である。

會員より夫々此上とも益々斯道に貢獻さるゝ様希望を述べ、且つ各自腹臆なき意見を交換して解散せるは十時半、頗る盛會であつた。

出席者左の如し（いろは順）

飯塚 茂氏（來賓）

柴田部長、飯塚師範、中野師範

石渡泰三郎

岩崎 三郎

箱田 達磨

葉山健二郎

近岡 源三

太田秀次郎

香下 玄人

門倉 森	吉武 吉雄	高橋 貞作	谷岡 謙	高橋順之助	塚本福治郎	中村 愛作
中村 壯吉	内海 勝二	野田市太郎	山田 又司	福澤時太郎	小林武次郎	阿部 英兒
安藤徳太郎	淺見 淺一	齋藤 衡平	木村喜八郎	峯岸 鎮治	宮永金太郎	平沼 亮三
守谷 正毅	菅原 浩					

其他柔道部現部員側よりは幹事、桐山、高松、淺見、五島の諸氏出席。因に一月十八日の鏡開式には淺見淺一氏出場警視廳柔道教師皆川五段と戦ひ、力戦の結果淺見氏優勝となつた。

### 會員塚本太作君の逝去

君は明治三十八年頃より四十四年迄、選手として又幹事として部の爲に非常の功勞あり、殊に選手としては石渡泰三郎平賀恒次郎、中野榮三郎の三君と共に三田の四天王と稱せられ、東都學生柔道界の牛耳を取り、三田柔道部の武名を滿天下に轟かしめ、部内にありては玉の如き人格と緻密の頭腦を以て部の發展に盡力せられ、卒業後大日本製糖に入社し、本社、並に上海、九州の各支社を経て臺灣斗六工場長となり、最近同社の臺灣支社營業課長に昇進せられ、多年の研究幾多の經驗により、愈々同君本來の實力を發揮し、同社の中心として將に本舞臺に入らふとするの秋、九月二十六日意外にも狭心症を以て其事務室机上に倒れられたるは、誠に痛ましき限りである。

尙遺骨は未亡人及び令弟福治郎君に護られ、十月十七日午後四時五十五分東京驛に着せられたるにより、本會委員並に先輩及同時代の友人多數同驛頭に之を迎へた。大阪驛にても關西三田柔友會より花環を捧呈し會員多數出迎へ、關門に於ても島泰次郎君初め多數會員之を迎送せられた。因に葬儀は十二日臺灣に於て大日本製糖會社の社葬あり、又東京に於ける告別式は十月二十三日午後一時より谷中天王寺に於て行はれ、本會委員先輩多數參列し、廿二日夜は委員先輩同期生數

拾名令弟福治郎氏邸にて通夜をなした。

### 青木會長の逝去

本會々長法學博士青木徹二先生十月十二日病を以て逝去せらる。先生は柔道部の大先輩にして明治三十年本塾大學卒業後外遊、同三十五年歸朝せらるゝや直に教授となり、翌三十六年部長に就任せられ、明治四十一年義塾教授を辭せらるゝと共に部長を福澤三八氏に譲られたるも、大學部講師として従來の通り教鞭をとられ、傍ら飯塚先生後援會創立以來其會長として、又同會を三田柔友會と改稱せる後も其會長として、前後約三十年間の久しきに涉り燃ゆるが如き熱誠と勃々たるフアイチングスピリットを以て、部員會員の元氣を鼓吹し、堂々たる人格と卓越せる識見を以て部員會員を向上に導き而も其間本會をして常に氣品ある一族の如く和合せしめられ、部及び會の問題には勿論一部員一會員の事たりとも進んで之を引受けられ、誠實に之を指導せられ、名部長として又名會長として大家族の家長として、全後輩尊敬の的であつた。先生今回の御逝去は、吾人の一大損失なるのみならず、義塾に於ても熱と力ある先輩を失ひたる事は非常の損失と稱すべく、將又國家的にも商法の權威者を喪ひたる損失は甚大なるは言を俟たざる所である。先生齡未だ五十七歳之れからが先生の熱誠と大人格と大學識を以て、社會國家の爲め大活躍をせらるべき時なりしに、惜みても尙餘りあり悲しみても尙盡きざる次第である。

十四日夜は十二時迄現部員が主となり、十二時以後翌朝までは、飯塚先生及び本會員中村愛作、大塚莊亮、柳井松祐、近藤謙治、石渡泰三郎、峰岸謙治、岡善次の諸君及び吉武、岩崎、宮永、阿部、野田の各委員が本會を代表して靈前に通夜をなし、十五日の葬儀には柔道部及本會を代表して金澤冬三郎氏より弔詞を供へ、部及び會並に本會關西支部より生花、花環を靈前に供へた。

尙十一月六日午後五時より綱町道場に於て柔道部及び本會主催にて先生の追悼會を催し、同時に塚本太作氏の追悼會を兼ねる事とし、式後兩先輩の靈を慰むる爲め、猛烈なる勝負二三を行ひ、後食事を行ふ事とした。

### 金澤氏會長に就任

青木前會長逝去せられたるにより、在京顧問及び委員の評議の結果、會員金澤冬三郎氏を會長に戴く事となり、同氏の承諾を得た。

同氏は明治三十三年より三十六年迄、義塾柔道部の幹事として柔道部一流の氣品の養成、部内の和合、後進の指導に専念せられ、同時に義塾體育會の重鎮として將又三田學生の中心勢力として、柴田一能、會員堀切善兵衛、中村愛作氏等と共に一時遊惰に流れんとせる三田學生を正道に引戻し、或は寮長として三田寄宿舎の大舍風を築ける等、常に三田學生の中心たりし人であつて、本會員中氏の指導を受けたるもの幾百人に上つてゐる。柔道部及び本會今日の盛況を見るに至りたる原因は多々あるべけれども、故青木先生及び金澤氏に負ふ處又大なりと謂ふべきである。目下大日本製糖會社の常任重役の激務にありて多忙なるにも不拘、奮つて會長の任に當られたるは吾人の感謝に堪へざる所である。

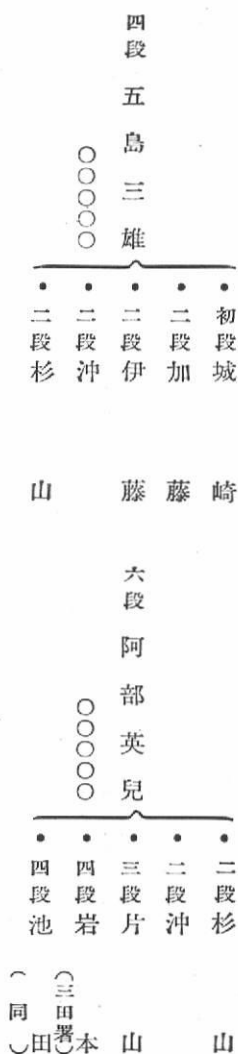
### 故青木前會長及び塚本太作氏追悼會

昭和五年十月十二日長逝されたる前會長青木徹二氏、及び同九月二十六日臺灣に於て客死されたる本會顧問塚本太作氏の追悼會は、十一月六日午後五時より綱町道場に於て開催された。

此日道場には鯨幕を廻らし、正面には香華供物等を以て潔齋されたる中央に祭壇を設け、兩氏の寫眞を飾る。定刻前青木氏の令息青木壯太郎氏、塚本未亡人、令嬢、塚本福治郎氏、並に金澤會長、板倉體育會長、飯塚、中野兩師範を始め、

體育會各部長幹事及び本會員柔道部員等約二百名の會衆陸續と到着、正五時に到るや、本會吉武委員長司會の下に嚴に開會、先づ金澤會長は起つて兩氏の本會に盡瘁せられたる功績、並に兩氏を失へる本會並に我國、學界及び事業界にとりて大なる損失なる旨の追悼の辭を述べらる。次で燒香となりたるが、中に塚本氏の唯一人の遺兒文子嬢（八歳）が未亡人介添にて、亡き父上の前に額ける時は一同其いぢらしさに思はず涙を呑んだ。次で飯塚師範は本會並に柔道部を、板倉教授は體育會を代表して燒香、各部代表の燒香を終りて後、左の五人掛勝負に移る。

四段五島三雄君は現部の首將にして、阿部英兒氏は爰に蛇足を附する迄もなく斯界の麒麟兒、共に冴えたる技と力を揮ひて兩氏の靈前に美事なる場面を演じた。



之にて式を閉ぢ、一同食事を共にし、しめやかなる中に嚴なる夕を送つた、時に九時。  
 當日の出席者左の如し。

- 板倉體育會長、金澤本會長、柴田柔道部長、飯塚、中野兩師範、石渡泰三郎、岩崎清一郎、箱田達磨、蟻木敏夫、近岡源三、大塚莊亮、尾上繁二、岡善次、海東要造、門倉森、吉武吉雄、谷岡謙、高田待雄、中野榮三郎、向山昌治、内海勝二、野田市太郎、柳井松祐、山田又司、松尾恒四郎、福田與志三郎、香下玄人、淺見又藏、秋山孝之輔、阿部英兒、佐野

甚之助、齋藤義臣、桐山勝治、峰岸鎮治、宮永金太郎、守谷正毅、茂木芳次郎、菅原浩、並に佐藤水泳部長外體育各部代表者並に現部員學生。

### 飯塚、中野兩師範勤績表彰會の件

飯塚師範の義塾柔道部師範として就任せられたるは、既に二十五年前にして、中野師範も就任後既に十五年を経過した。柔道部に於ては勤績表彰會開催の議あり、本會に於ても同様の議ある爲め、先般本會委員と部幹事との間に打合せ會を開きたる結果、明六年二月寒稽古終了式當日盛大なる謝恩表彰式を舉行する事に議一決し、當日は前例により舊部員と現部員との對抗紅白勝負を舉行する事とし、其他の方法につきては更に研究の上決定發表する事となつた。

### 關西支部記事

○九月二十七日、慶應俱樂部にて秋季總會開催、出席者二十六名。

豊島山人、宮崎清、山川迪吉、菅原剛寛、平賀恒次郎、田中泰藏、吉田精二、青木茂、大平博三、足立茂、山田久一、伊藤巖、津田信吾、後藤幹夫、土井徹太郎、上杉彌一郎、藪田元治、山本齋、住田三郎、榛葉達彌、小川虎之助、福岡一郎、山川涉、一坂力丸、永井元孝、松田彌一郎。

昭和四年度決算報告 承認

塚本太作代逝去に付き弔電を發すること。

左記の諸件決議。

(イ) 顧問増員。

(ロ) 對早稻田試合激勵の士を派遣する事。

(ハ) 委員の改選は全部留任。

○十月十五日

會長青木徹二氏逝去に付き弔電、弔花を供へ哀悼の意を表す。

○十月十七日

塚本太作氏の遺骨を令弟福治郎氏が護持して臺灣よりの歸途、大阪會員は之を梅田驛頭に迎へて弔意を表し、花輪を贈呈した。

○十一月十三日

義塾角力部來阪、歡迎の微意を表す。

○十一月十四日

山田久一、小川虎之助兩氏對早稻田試合激勵の爲め上京。

本年度納入金の内金百圓也を持參す。

○十一月二十一日

慶應俱樂部に於て山田、小川兩氏の對早稻田試合の報告會を開催、出席者左の如し。

松田彌一郎、小川虎之助、山川涉、山田久一、堀尾幸、榛葉達彌、伊藤巖、土井徹太郎、白石泰、菅原剛寛、豊島山人、伊澤雄次郎、一坂力丸、坂東舜一、山川迪吉、平賀恒次郎、藪田元治、足立茂。

來賓 塚本福治郎、岡安寛司。

山田、小川兩氏より試合の詳細談あり、兩氏の平常見る大阪の柔道界より本塾の道場に眼を轉する時は、熱と意氣に缺け

たる點多々ありとて其奮起を促された。

來賓塚本氏より亡兄に對する謝辭があつた。

## 三五 昭和六年史

### (一) 寒 稽 古

寒氣凜烈肌を劈く嚴冬、稽古着を肩に曉に尙消え残る明星を仰ぎつゝ、冷え切つた大地を碎けよとばかり吾家を踏み出す時、男子の豪快何ものか之に比すべき。この剛健にして勇壯なる快味こそ、寒稽古に勵む者の持つ偉大なる特權である。光輝ある吾々の部史を緋けば、寒稽古の如何に隆盛で、且つ多大の効顯のあつたかゞ窺はれる。嘗てはその期間も三十日であつたが、現在は種々の都合から三週間に短縮されてゐる。又本年より開始時間も三十分繰り下げられて午前五時になつた。此等の時間短縮は、交通其他の關係上改正も亦止むを得なかつたのであるが、指導者たる者は各個人の精神的活動を旺盛ならしめて、彼に失ひたる所を之に依りて償ふに努めなければならぬ。

本年の寒稽古は一月十四日より二月三日迄行はれたが、前述の如く特に時間が繰り下げられたに就ては、その爲め學校の始業時間に差支へざるやう、朝食を道場に於て攝り得る便宜が興へらるゝこととなり、部員一同殊に子供連中は此の上もない喜びであつた。稽古後一風呂浴びて一堂に會し、半白の老先輩より幼稚舎ボーイに到る迄、溫い味噌汁に舌鼓を打ち七杯九杯と椀敷を重ね、歡話談笑一百の大家族が喜々として興ずる有様は、三田ならでは見られぬ美景である。